古代十二章

中西　進

毎日新聞社

代十一章

中西　進

毎日新聞社

著者略歴
1929年　東京に生まれる
1953年　東京大学文学部卒業
専攻　国文学
現在　成城大学文芸学部教授　文学博士
主な著書　「万葉集の比較文学的研究」「万葉史の研究」（以上，桜楓社）「山上憶良」（河出書房）「柿本人麻呂」（筑摩書房）「万葉の詩と詩人」（弥生書房）「万葉の心」（毎日新聞社）「万葉の世界」（中央公論社）
1964年　読売文学賞受賞
1970年　日本学士院賞受賞

古代十一章
定価九〇〇円
昭和四十九年五月二十日　印刷
昭和四十九年六月十日　発行
著者　中西　進
編集人　桑原隆次郎
発行人　朝居　正彦
発行所　毎日新聞社
東京都千代田区一ツ橋
大阪市北区堂島
北九州市小倉北区紺屋町
名古屋市中村区堀内町
印刷　図書印刷
製本　佐久間製本
〈検印省略〉
0095—500227—7904

目次

はじめに……5

〈伝承〉

ことばの誕生……11
道行の伝承……22
伝承の文体……43
歌語り……59

〈和歌〉

和歌と歴史……75

和歌と海彼……94
異風と国風……131
民衆と詩心……147

〈風　土〉

帝王の夢……177
越中の家持……192
高松塚とその周辺……215

十一章のノート……234

装幀　安彦勝博

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

古代十一章

はじめに

古代は、私にとって長く魅惑にみちた世界であった。それは、これからも変わることがないだろう。

古代には、二つの要素があるように思われる。一つは、それが遥かな過去の時代だということである。生々しい肉体をうしなった静寂にみちて、現代とはかなり異質な要素を内蔵した時代が古代なのであろう。科学文明が不可解にしてしまったものは、古代のもろもろをなぞのように感じさせるし、神秘的な存在として古代を感じさせる。

しかし一方、そこにわれわれ現代人の、紛れもない原像を感じることも事実である。文明に進歩はあっても、人間には変わりはないのだろう。たかだかある種の変化だけがあるとしたら、古代は母なる世界としてわれわれの本質的なものを、しかも純粋な形で示してくれるにちがいない。

私は、こんな古代を知りたいという気持にかり立てられて来た。

われわれは古代の書物を、それ自体すでに出来上がった一つ一つとして見がちだが、それこそ、われわれの歴史の黎明がいつかわからぬように、いつからともなく発生し、形づくられつづけて来た古代の文学や歴史を、ある時点でうけとめ、取捨を行って定着させたものが、古代の文献であるにすぎない。したがって、そこに記された事柄を、そのままの形で、かつ平面的に捉えるかぎりでは、書物の成立の時点の、しかも一つの形、おおむね八世紀初頭の偏った表現をしか発見できない。

われわれは、古代の文献に塗りこめられた厚い壁土をはがし、いろいろな伝承を時間的に位置づけ、立体的な構造に組みたて直す必要がある。それは土の中に埋もれた廃墟を発掘し、壮麗な建築物をイメージの中で復元するのと、まったくひとしい魅力を湛えている。何気ない一行にすぎないものが、古代人の豊饒な感情を担っていたり、生命と表現との間に橋渡しされた切迫感を滲ませたりしていると、堪えがたい感動がある。しかもそれは、母なる神秘への感動なのである。私は、シュリーマンの「古代への情熱」を、さながらにうべなうことができる。

ここにおさめた諸章も、今まで古代をたずねて来た道程に草したいくつかの試論である。

ここでいう古代とは、おおむね八世紀までの間をさしているが、その中には散文をもって書かれた「古事記」「日本書紀」「風土記」その他があり、和歌の集としては、ぼう大な「万葉集」がある。この前者の母体は説話と称せられるもので、それを歴史化しようとする試みの中で記紀はでき上がっている。この説話を中心に考えたものを、〈伝承〉として四章おいた。私は「説話」とよぶより、「伝承」とよぶのがふさわしいと考えているからである。

この四章の中で、私は、ことばがどのようなものとして誕生し、どういう散文文学を作り上げていったか、ということを考えてみた。それはおのずからに、次の和歌に向かって展開してゆく姿を示している。

「万葉集」の和歌は、ほぼ七世紀以降のもののようである。その点、古代伝承のあとをつぐ形になっている。だから、古代和歌の中には、もう文化の匂いがたちこめていて、成熟ということばがふさわしい様相も呈している。そこで、和歌の四章は、最初の万葉の時代的展開のほかに、中国大陸との関係における和歌の姿と、奈良朝文化の中にあった万葉びとの生活との考察をもって構成してみた。

ついで〈風土〉は、「風土の中の古代」といったものを三章おいた。われわれは高層建

築の櫛比する現代生活をいとなみながら、ちょっと何かあると、たとえば高松塚の壁画のようなものに遭遇する。風土は古代を秘め、古代にたやすく出逢うことができる。いや、正目にすることはなくとも、風土から古代を心の中に、復元することは、さほど困難ではない。この三章も、そうしたエッセイである。

以上十一章は、このような関心から書かれたもので、巻末に記すように、それぞれ独立して書かれたものである。しかし、各章は文学の流れにそって展開する形で配列した。だから、このままの順序によって読んでくださってもいいし、また任意の章を拾ってくださってもいい。実は、全体を通読すれば、多くの体裁上の不統一や、重複に気づかれるだろうが、あえてその修正を施さなかったので、一章ずつでも、それなりのまとまりはあるはずである。

内容上も、わりあい初歩的な解説のものもある半面、学界的にも新しい意見を述べたところもある。かえり見られることの少ない側面から考えてみたものもあれば、半面、気ままなエッセイもある。それでは困ると、お叱りをうけるかもしれないが、むしろ多面的である方が、読者個々の折々の状況に応じて、右のいずれかに共感をもってくださるのではないかと、私は願っているのである。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

〈伝承〉

ことばの誕生

一

書紀、神代の下巻は、いわゆる天孫降臨をもってはじめられ、天上の神々が地上に舞台をうつす壮大な神話の転換にふさわしく、ニニギの尊の降臨に先立って、多くの物語が序曲をかなでている。それは、天のホヒの命の派遣と、その子タケミクマの大人の派遣およびその失敗であり、天ワカ彦の死であり、タケミカヅチの神の交渉であって、降臨を含めて八つもの「一書」がそえられているように、古代伝承の詞章として、いかに聖なる物語の主要部分であったかは、ことばを俟たぬようである。

さて、この部分の、天上界の主神たる高ミムスビの尊が葦原の中つ国にニニギの尊を遣すところは、この地上界を次のように描いている。

彼の地に、多に螢火の光く神、及、蠅声なす邪しき神あり。復、草木、咸能く言語ふ。

螢のかがやきは、古代人にとってふしぎな光であったのだろう。そのようにふしぎにかがやく悪神や、蠅のように音をたてる邪神が、この地上世界にはいるという。蠅も人名に用いられるように、邪悪なる力あるものであった。

そこで私の心ひかれるのは、この蠅を「蠅声」といっていることだ。蠅が邪悪である点は、たとえば今日ふうにいって諸病を伝染するところにも、汚物にも好んでむらがるところにも、また執拗に飛び回るところにもあろう。しかし、ここでは一切それらのことを問題にはせず、もっぱら「蠅声」を邪悪なるものとしているのである。騒然とうなり立てるあの蠅の音、そこに邪悪なる力を感じているのだった。

これは、先にも少しふれた「一書」によって、いっそう確実となる。第六の一書は、同じ件りを、

葦原の中つ国は、磐根、木株、草葉も、猶ほ能く、言語ふ。夜は熛火の若くに喧響ひ、昼は五月蠅如す沸き騰る。

という。先の本文では、螢火はかがやくこと自身において邪悪であったが、ここでは、

熛火（もえさかる火）が「喧響」なる状態の比喩となっているのである。

そして、「喧響ひ」「沸き騰る」実体は何かというと、「葦原の中つ国」の「能く言語ふ」磐根、木株、草葉であった。騒然たる岩石草木の、沸き騰るごとき喧響が、いまだ「主」を得ぬ国土のさまとして認められているのであり、紀本文で「草木、咸能く言語ふ」状態が「邪しき神」と並べられているところによると、この草木の様子に、邪神に似た力を感じていたことが知られる。

この国土のさまが、書紀の語り手ないし書き手の、個人的認識でなかったことは、右の異伝の存在をもっても明らかだが、それだけにとどまらず、神代紀上巻にも語られている。その末尾、スサノヲの出雲治定に関しても、第六の一書では、「夫れ、葦原の中つ国は、本より荒芒びたり。磐石草木に至及るまで、咸能く強暴し。」とあり、これに対してスサノヲは、「摧き伏」せて「和順」わせようという。摧き伏せられるべき「荒芒」が、磐石草木の「強暴」さであった。ここには何も記されぬが、先によれば、この「強暴」も、「言語ふ」ことであり、五月蠅なして喧響の沸き騰ることだったにちがいない。

また、出雲の国の造の神賀詞に「豊葦原の水穂の国は、昼は五月蠅なす水沸き、夜は火瓮なす光く神あり。石根、木の立、青水沫も事問ひて荒ぶる国なり」というのも同様で

あろうし、天孫降臨によって「事問ひし磐根、木の立ち、草の片葉をも言止めて」（大殿祭）といった、大祓や祟神を遷し却る祝詞などに出て来るものも、右とひとしいだろう。

二

こうした、太古を語って強靱に現れつづける認識は、われわれに二つのことを教えている。すなわち、一つは彼らにとっての原初の世界が騒然たる渾沌をもって描かれていたことであり、もう一つは、その渾沌が、自然の邪悪なる言語に充ちているという形で捉えられていたことである。

この前者において、われわれは神話の世界を理解する枢要な座標軸の与えられたことに気づく。

古に天地いまだ剖れず、陽陰分れざりしとき、渾沌たること鶏子の如くにして、溟涬にして牙を含めり。

書紀はこうした一文をもって神々の世界を語りはじめる。この未剖不分の渾沌こそ、太

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com